經濟論叢

第九十二巻　第五號

一八九〇年代ロシア資本
主義論争の特徴と背景……田　中　真　晴　1

ロック経験哲学の構造（二）……平　井　俊　彦　21

日本における金本位制の成立（2）……小　野　一　一　郎　38

明治三十二年所得税法と
減価償却会計（その二）……高　寺　貞　男　58

昭和三十八年十一月

京都大學經濟學會

一八九〇年代ロシア資本主義論争の特徴と背景

——プレハーノフと一八九〇年代論争 (一)——

田中真晴

一 はしがき

プレハーノフが一八八八三—八五年につくりだしたロシア資本主義発展論の内容はすでに述べた。[1] わたくしはそのさい、行論の道すがらにおいて、内容の再構成の仕方において、プレハーノフの思想と論理の特質に論及するところがあった。しかしプレハーノフの思想と論理の特質を正面からとりあげることはしなかった。なぜならば、その仕事は、プレハーノフの先駆的労作のみならず、プレハーノフの成熟期の諸労作が知られ、かれの経済思想の全ぼうがあきらかになってはじめて、果されるからである。わたくしは前稿までで、プレハーノフの先駆的ロシア資本主義論の研究をおわり、本稿以降、プレハーノフ研究の第二部・プレハーノフの成熟期を中心とする研究に移る。[2]

プレハーノフの成熟期という言葉は、かれの思想全体について用いるにしても、わたくしの問題とするかれの経済思想、とりわけロシア資本主義論・ロシア社会論について用いるにしても、自明的な概念ではなく、説明を必要としている。しかしながら、その説明は、研究にさきだってあらかじめ与えられる性質のものではなく、研究と論

述自体のなかではじめて具体的に与えられるはずである。ここではただ、プレハーノフの成熟期という語によってわたくしが考えているのは、ほぼ一八九〇年ごろからの、すなわちプレハーノフが三十歳台の半ばに達したころからの時期のことであることだけを云っておきたい。プレハーノフはそのころから、史的唯物論を中心とする哲学の分野に、ロシア思想史の分野に、それよりもややおくれてではあるが文学芸術論の分野に、注目すべき労作を発表しはじめた。八〇年代の労作を重要視し、そこにプレハーノフの以後の展開の起点を見ることは、わたくしの主張点のひとつである。しかしプレハーノフが史的唯物論を中心とする諸研究においてマルクス主義理論家として成熟したのは九〇年代に入ってからであった。経済思想の成熟という概念は、プレハーフの思想全体の、マルクス主義理論家としての成熟という概念以上に説明を必要とするが、ここではプレハーノフが、八〇年代にかれがうち出したロシア資本主義発展論（＝ロシア資本主義化論）をもちろん保持しつつも、それだけではなく、ロシア社会論ともいうべき、ロシアの伝来的な社会構造の類型的特殊性の問題にも眼をむけたのが主として九〇年代以後であったことを指摘しておきたい。プレハーノフのロシア論はそれによってまさしくプレハーノフ的なるものとして姿を整えるのである。そしてそれは、史的唯物論のプレハーノフ的解釈に関連し、またかれのロシア史などへの研究領域の拡大と結びついていた。その意味において、プレハーノフの経済思想の成熟は、プレハーノフの思想成熟を基盤としその一環をなすと考えられるのである。[3]

右に述べたことは、論述のいまの段階においては、いうまでもなく暫定的、仮設的な性格をもっているのであって、プレハーノフ研究の第二部として予定している諸論稿においてその内容が具体化されるはずである。

ところで、プレハーノフの思想的・経済思想的成熟は一八九〇年代のロシア資本主義論争を背景にしていた。否、

背景としていただけでなく、かれ自身が論争に参加し、そこに提出された問題に対決してゆく過程において、思想的・経済思想的に成熟していったというべき点がある。それだけではない。九〇年代論争はロシアの経済諸思想が開花する場であり、とりわけプレハーノフの研究においてどうしても比較の第一の対象とならざるをえないレーニンがそこに登場するという意味で、重要である。いうまでもなく、ある思想なり理論なりの特質なるものは、暗示的にせよ明示的にせよ、つねに他者との比較を前提としていえることである。

われわれは、本稿すなわちプレハーノフ研究第二部の第一稿においては、前稿「プレハーノフのロシア資本主義論」においてはいりこんだプレハーノフの内部からひとまず外に出て、旧稿「一九世紀末ロシア資本主義論史の研究序説」[4]に接続する地点から、一八九〇年代の論争を考察しよう。プレハーノフはまず群像のひとりとして視野に収められる。われわれは、九〇年代の論争、ロシア経済思想の全景のなかでのかれの位置と姿勢を確認したうえで、かれに近づいてゆこう。しかし、だからといって本稿はプレハーノフ研究のたんなる手段としての意味においてだけ九〇年代論争をとりあげようとするのではない。旧稿「一九世紀末ロシア資本主義論史の研究序説」が、それ自体としては一八七〇―八〇年代の、プレハーノフ以前のロシア資本主義論の整理をテーマとすることによって、プレハーノフの先駆的ロシア資本主義発展論研究への序論であったように、本稿は九〇年代論争自体をテーマとすることによって、プレハーノフ理解の視座がそこにすえられることを期待するのである。およそ個別的なるものの意味は一般的なるものとの関連においてのみあきらかになる。一般的なるものの理解の度合いは個別の理解の度合いを規定する。他方では、一般との関連においておこなわれる個別の究明が、一般的なるものの理解を前進させる。プレハーノフの経済思想の構造の研究は、ロシア経済思想史とりわけロシア・マルクス主義経済思想史研究の一環

であり、そこへと成果を投げかえしてゆくべきであるが、それと同時に後者の研究が、前者すなわちプレハーノフの経済思想の構造理解の前提となる面をもつのである。

(1) 「プレハーノフのロシア資本主義論 (一)、(二)、(三)」(『経済論叢』八九巻五号、九〇巻四号、九一巻三号)

(2) わたくしは、「プレハーノフのロシア資本主義論」という共通の標題で、プレハーノフの成熟期の研究（プレハーノフ研究第二部）をつづけて発表する心算であったので、(三)のおわりに（未完）と記した。この（未完）はとり消し、プレハーノフ研究第二部はいくつかの論文として書くことにする。前稿(三)までで相対的にまとまった第一部とすると、その標題は「プレハーノフのロシア資本主義論」よりも「プレハーノフの先駆的ロシア資本主義論」のほうがふさわしい。

(3) プレハーノフの思想の成熟というのは、わたくしが設定した概念である。ふつうにはプレハーノフの思想の時期区分は、前稿で指摘したように（『経済論叢』八九巻五号一一頁参照）、(1) ナロードニキの時期 (2) マルクス主義の時期 (3) メンシェヴィキの時期という分けかたがとられている。わたくしがプレハーノフの成熟期というのは、右の時期区分に照すならば、(2)と(3)にわたるが(2)と(3)の全部をふくむのではない。プレハーノフの成熟期というのは本文でいうように、マルクス主義理論家としての成熟期のことであるから、(2)のうちでも九〇年代以前はそれに入らない。他方、成熟期の下限の規定は困難であるが一応第一次ロシア革命以前にかれの思想は本質的な点でできあっていたとみたい。プレハーノフ晩年の思想が、一九〇三年ごろまでのそれに比べて変質後退したかどうかは、ここでは論断できない。ただ、通説におけるプレハーノフの思想の時期区分は、プレハーノフの党的立場の移りを基準としており、思想の内容自体を基準としていない点、思想から立場を説明するよりも、立場から思想を評価する点において、総じていえばプレハーノフに対する内在的理解の不足と早急にかれを「採点」しようとする傾向をもつ点において、納得しがたいものをもっている。

(4) 『経済論叢』八九巻一号所載。

二　九〇年代論争の特徴と背景

一九世紀末のロシア資本主義論史の第一段階である七〇年代においては、二つの道の可能性の理論が支配した。第二段階である八〇年代においては、ロシア資本主義没落論とロシア資本主義発展論とが対立した。九〇年代は第三段階にあたるが、基本的な対立図式は八〇年代と同じであって、発展論対没落論である。その点、九〇年代のロシア資本主義論争は、八〇年代の議論の延長線上にあるといえる。しかし九〇年代の論争は、その規模において、条件において、様相において、八〇年代のそれとは異っていた。

第一に、ロシア資本主義に関する労作の量が八〇年代とはくらべものにならぬほどに増大した。そしてほんとうに論争という名に値する論争は九〇年代になってはじめてみられるのである。八〇年代においては、ヴォロォツンフ『ロシアにおける資本主義の運命』は合法文書であるが、そのロシア資本主義論を借用したチホミーロフ論文「われわれは革命からなにを期待することができるか」も、チホミーロフ＝ヴォロンツォフ批判のかたちでロシア資本主義発展論を展開したプレハーノフ『われわれの相違』も、ロシアにおいては非合法文書であった。非合法文書による批判に対して合法文書において回答することはありえない。だから論争として期待されるのは、亡命革命理論家たちのあいだでの、非合法文書における論争だけであったが、ロシア資本主義に関するめぼしい展開はついにみられなかった。[1] だから八〇年代には批判と反批判の過程をふくむ意味での本来の論争はなく、没落論に対する発展論の対立と批判だけがあったのである。

九〇年代にはマルクス主義理論の側の労作も、政治に触れぬ「純学問的性格」のものに限って、しかしそれでも

しばしば禁圧を蒙りながらではあるが、合法出版物として発表されるようになった[2]。このことの意味は大きい。これによって合法出版物を舞台としてロシア資本主義論争が展開される可能性がひらかれた。ストルーヴェ『ロシアの経済的発展の問題にたいする批判的覚え書、第一冊』（一八九四年）のほか、プレハーノフ、レーニンたちの大著も、匿名で、検閲を考慮して政治に触れぬように細心の注意をしながら、合法文書として刊行された。プレハーノフ『史的一元論』（一八九五年、正確なタイトルは『史的一元論の発展の問題によせて』）、『ヴォロンツォフ氏の諸労作におけるナロードニキ主義の基礎づけ』（一八九六年）、レーニン『ロシアにおける資本主義の発展』（一八九九年）などはそうした合法的出版物であった。マルクス主義者と合法マルクス主義者との共同論文集も企てられた。『ノーヴォエ・スローヴォ』誌（一八九七年）『ナチャーロ』誌（一八九九年）は短期であったがマルクス系の雑誌となり、ほかに『ミール・ボージー』『ナウチーノエ・オボズレーニエ』『ジーズニ』誌などもマルクス系論文に場所を与えた。プレハーノフ、ストルーヴェらがドイツの雑誌（『ノイエ・ツァイト』『ブラウンス　アルヒーフ』誌など）に発表の場所をえたことも、九〇年代の新しい事象であった。

しかし九〇年代においても、非合法文書は勿論重要である。合法文書においては哲学と純経済的議論にかぎらねばならず、ツァーリズム権力、階級闘争などをふくめた総体的なロシアの現状認識は、非合法文書にのみ載せられた。このことはロシア・マルクス主義のロシア資本主義論の考察において注意すべきひとつの点である。

第二に、九〇年代にはロシア資本主義論の担い手が多様化し、かつ論争の領域がひろがった。八〇年代には没落論＝ナロードニキ、発展論＝マルクス主義（プレハーノフ）という単純な図式であった。さきにも述べたように、九〇年代の論争も発展論対没落論を基軸として展開された。しかもかならずしもナロードニキ＝没落論ではなく、

ナロードニキのなかにも没落論には同意しないものがでてきた。しかもそのようなナロードニキのひとりであるミハイロフスキーこそは、マルクス主義理論批判の第一人者、『ルースコエ・ボガートストヴォ』誌の編集者（一八九二年以降）、九〇年代前半のナロードニキ主義復興の中心人物であった。かれはマルクス主義に対する論争を、哲学・社会科学方法論・道徳論の領域においておこない、ナロードニキ主義とマルクス主義の思想体系としての対決に点火した。

ナロードニキかならずしも没落論者でないとすれば、他方では発展論者かならずしもマルクス主義者ではなくなった。八〇年代にはロシア・マルクス主義理論の担い手は外地にある小団体「労働解放団」であり、そのなかでも本格的な理論家はプレハーノフだけであったが、九〇年代にはロシア国内にレーニン、マルトフ、ポトレソフなどの若きマルクス主義インテリゲンツイアが育った。かれらはいうまでもなくロシア資本主義発展論をとった。ところがいまひとつのグループ・合法マルクス主義者もまたロシア資本主義発展論の主張者であった。合法マルクス主義というのは、ストルーヴェ、トゥガンーバラノフスキー、ブルガコフ、ベルジャエフ、フランクたちのグループの、一八九四―九九年における一種の思想運動である。マルクス理論を全面的にではないが相当部分にわたって採り、それを武器としてロシアの西欧化（近代市民社会化）をめざす運動でそれはあった。合法マルクス主義者という名は、かれらが地下生活者でなく、合法的身分の生活者であったことに由来している。[3] ただしかれらも非合法活動にタッチすることはあったし、ある時期にはマルクス主義にきわめて近接した。とりわけこのグループの思想的リーダー格のストルーヴェはそうであった。ブルジョワ合理主義の生活的・思想的伝統が欠けている国で、おくれて登場した市民社会思想が、マルクス理論を近代主義的に解釈してそれを身につけ、かつ抬頭しつつあるマルクス主義

運動とある程度に手を結びつつ、生活をとりまく前近代的なもの、ときにはブルジョワジー自体に対しても闘うことは、後進諸国にある程度共通的にあらわれる、興味ぶかい現象であると考えられる。合法マルクス主義はその典型であった。ストルーヴェらはわれわれがレーニンの著作から受ける印象以上に、ある時点ではマルクス主義に近づいていた。[4] しかし合法マルクス主義をマルクス主義の一種とすることは妥当でない。わたくしは、マルクス主義と合法マルクス主義をあわせていうときにはマルクス系という言葉を使うことにする。

右に述べたように、九〇年代は、ナロードニキのなかに没落論に賛成しないものがでてくるとともに、マルクス主義者ならぬ合法マルクス主義者が、発展論の主張において、ナロードニキ批判において、マルクス主義者と共同戦線を張った。論争の領域はロシア資本主義論にとどまらず思想体系の攻防に及んだ。そしてナロードニキ内部において、およびマルクス系内部において差異とある種の対立が生じた。

第三に、そしてもっとも重要なこととして、八〇年代と九〇年代とでは論議の対象たるロシア経済自体が、その間に変化発展している。社会の雰囲気も変った。

ロシアの商工業は、七〇年代初頭のブーム以後、発展をつづけてはいたが、その歩みは緩慢で停滞がちであった。前稿で指摘したように、八〇年代におけるロシア資本主義没落論の抬頭と浸透の実在的背景はそこにあったと考えられる。九〇年代に入るとロシアの工業は急テンポで伸び出した。九〇年代のうちに綿絲、綿織物の生産はほぼ倍加し、石炭、石油、銑鉄はほぼ三倍になった。南部の製鉄・石炭業は外資によって最新の装備をそなえ、ウラルの農奴制的鉱業を圧倒した。[5]

九〇年代の工業の発展を保護促進したのはヴィッテ蔵相（在任一八九二―一九〇三）の工業化政策であった。ヴ

ィッテの政策の性格については議論があり、トンプキンスのように、ヴィッテは前任者の努力の成果を利用した良心的で保守的な行政官にすぎなかったという解釈と、フォン・ラウエのようにとくにヴィッテ体制 Witte System という言葉を用いて「ロシア工業の父ヴィッテ」の意義を強調する解釈とがある。[6] ヴィッテ論に立ちいることはできないが、かれの個々の政策は前任者またはそれ以前からの継承であるものがすくないにしても、ロシアが先進国に追いつくには、いかなる犠牲をはらっても急速な工業化が必要であるという、そしてそれはツァーリズム国家の強力な政策が私企業の自由な活動を誘いだすことによって果されるのだという、強烈な意識の心棒の通っているヴィッテの政策体系は、やはりひとつの時期を画するものであった。高度保護関税（国内製造工業の保護と関税収入のため）、外債による鉄道建設、民有鉄道の国有化、外資導入、国立銀行を通じての大企業への資金供給、間接税中心の重税政策、穀物輸出の促進、金本位制の実施などがその内容であった。工業化の強行の負担は農民にかけられた。それでも国庫の赤字は累積し、一九〇〇―一九〇三年の恐慌のなかでヴィッテは恐慌の責めまで負わされて罷免されて終るが、九〇年代においてはヴィッテは好況の波に乗って、貴族地主を中心とする反対派をおさえた。鉄道建設が国内の製鉄業を中心とする関連産業に対して巨大な需要を創造し、それらを急速に発展せしめたこと、そして広大な国土のロシアにおいてはとりわけ鉄道が全国的商品流通に対して決定的な意味をもつことからだけでもわかるように、[7] ヴィッテ体制がロシアの生産力の発展・資本主義的発展を助長したことには疑いがない。しかしヴィッテ体制はロシアの社会構造の近代化を果しはしなかったし、目的としてもいなかった。その工業化政策は一方では資本の集積・集中の早熟化を促進したが、ロシアが依然として圧倒的な農民の国であることを変えはしなかったし、農民をしめつけている前期的諸関係を廃棄することもなかった。[8][9]

九〇年代のロシア資本主義論争のいとぐちとなったのは、九一―九二年の飢饉であって、ヴィッテ体制自体ではなかった。しかしヴィッテは飢饉のすぐあとに蔵相となり、九〇年代のロシア資本主義論争はヴィッテ体制下の、右のような限定づきではあるがともかくも急速な工業発展を背景とし、対象として、おこなわれた。だから、九〇年代にはロシア資本主義没落論が頽勢におちいってゆくのは当然であった。典型的なロシア資本主義没落論者ヴォロンツォフは、九〇年代だけでなく、一九〇〇年代後も終始かわることなく、たじろぐことなく、同じことを書きつづけて、ローザ・ルクセンブルグから「頭脳ではなくて性格を尊敬せしめられる」[10]という皮肉を浴びせられた。しかしナロードニキのロシア資本主義論はダニエリソン『改革後のわが国の社会経済概要』(一八九三年)を頂点とし、せいぜいのところヴォロンツォフ『理論経済学概要』(一八九五年)までで主要労作はおわるとみるべきであろう。九〇年代の中葉以後はほとんど発展論の独壇上であったといってよい。レーニン『ロシアにおける資本主義の発展』はナロードニキ的ロシア資本主義論の支配下においてそれを批判したものではもはやなかった。『発展』の時点においてはナロードニキの敗勢はすでに決定的になっており、『発展』はナロードニキ経済理論・ロシア資本主義論批判の総括、発展論の理論的・実証的完成化の企てであった。ストルーヴェは一八九三年にすでに自信をもってつぎのように書いている。「(プレハーノフの)『われわれの相違』(一八八五年)は見込みのない着手 ein hoffnungsloser Beginn のようにみえた。しかし今日では事情がちがっている。いまでは資本主義の発展は争う余地のないあきらかな事実である。……資本主義への発展が、疑いもなく急速な歩みを示した現在においては、一方でマルクス主義を受けいれながら、他方では資本主義の地盤にたつのを拒否する立場を固執するのは、あまりにも空想的であり、そのような立場の命脈はもはや尽きている」[11]と。

第四に、労働者運動の昂揚とマルクス主義の国内的および国際的状況の変化。九〇年代におけるロシアの工業の躍進はその裏面として、労働者運動の昂揚を伴った。西欧の一八四〇年代を想起させる、原生的労働条件に対するはげしい抵抗がストライキの形をとって頻発した。その波のなかへマルクス主義が持ちこまれ、ロシア・マルクス主義はそこではじめて大衆的労働者運動と結びついた。その最初の組織「労働者階級解放闘争同盟」（一八九五年結成）の中心にレーニンが立っていた。プレハーノフたちがスイスで待ちこがれていたことが実現しはじめたのである。「労働解放」団は一八八三年の創設以来、ロシアにおいてマルクス主義的労働者党をつくりだすための準備をすることを目標としていた。しかし、「労働解放」団は旺盛な著作翻訳活動にもかかわらず、組織づくりの点では十年の間に、ペテルブルグのブラゴーエフ・サークルその他の小さいサークルと、それも短期間の結びつきをもちえたにすぎなかった。[12] 一八九五年五月、レーニンがプレハーノフをジュネーヴに訪れたとき、プレハーノフの喜びはたいへんなものであった。[13] レーニンのプレハーノフに対する傾倒も九〇年代においては、みずから「恋慕」と形容したほどのものであった。[14] ただし知られているように、レーニン、マルトフら「労働者階級解放闘争同盟」の首脳は一八九五―九六年に逮捕されてシベリヤに流刑され、「同盟」は「経済主義者」に嚮導されることとなり、またロシア・マルクス主義党は形式的には一八九八年に結成されたとはいえ、実質的な成立は一九〇三年を待たねばならなかった。ロシア資本主義論の点からいえば、一八九九年にいたる流刑がレーニンに『発展』を書く時間を与えたのであった。

九〇年代のロシアの工業の躍進が、九〇年代中葉に大不況から恢復して日ざましい上昇局面へ入った世界資本主義を背景とし、それから影響を受け、またその一部をなしたように、ロシア・マルクス主義の抬頭は、ドイツ社会

民主党を中核とするマルクス主義の国際的規模での上昇気運を背景とし、それに支持され、またその上昇気運の一部を担った。

プレハーノフは第二インターナショナルの創立大会（一八八九年於パリ）に出席し、人民の意志派を代表するラヴローフがながながとロシア史の講義のごとき演説をして、血の気の多いフランスのアナーキストを怒らせ、あわや喧嘩という一幕があったあとに登壇して、「ロシアにおける革命運動は労働者の革命運動としてのみ勝利することができるのです。そのほかの道はわが国にはないし、ありえません」[15]と述べて拍手を受けた。

プレハーノフがエンゲルスにはじめて会ったのも第二インターの創立大会においてであった。エンゲルスは「労働解放」団の創設当初から全面的にプレハーノフたちを支持していたかのごとくに通説ではいわれているが、この通説は誤りであろう。エンゲルスは八〇年代の中葉にはロシアの革命的諸派についての的確な情報を握っていず、プレハーノフらに対してかなりに両義的な考えをもっていたとするほうが真相にちかい[16]。しかしエンゲルスはやがて人民の意志党の崩壊を認め、他方第二インターの創立大会の後にプレハーノフをロンドンに招いて一週間話しあい、かれをふかく信頼するようになった。プレハーノフの論文「ヘーゲル死後六〇年によせて」（『ノイエ・ツァイト』誌一八九一年）はエンゲルスの称賛をえた。プレハーノフは第二インターにおいて重要な役割りを受けもち、カウツキーと並ぶほどのマルクス主義理論家とみなされるようになった[17]。ロシアについてのプレハーノフの論稿が、ロシア問題のもっとも信頼すべき見解として迎えられたことは勿論である。他方、『資本論』のロシア語訳者でマルクスに眼をかけられ、マルクスの死後はエンゲルスの教えをうけていたダニエリソンは、マルクス・エンゲルスは自分の味方だと恃みつつ、ロシア・マルクス主義に対抗したのであるが、かれのライフ・ワークの改革後のわが

国の社会経済概要』（一八九三年）はエンゲルスから相当に手きびしい批判をうけ、エンゲルスがロシア資本主義発展論を支持していることを知らされたのであった。[18] 九〇年代のロシア資本主義論争はこのように、国際的なバック・アップの点からも、発展論に有利に、没落論には不利に展開した。

マルクス主義が、九〇年代にドイツ社会民主党を中心として、国際的な規模でめざましく進出した反面、マルクス批判が強まり、そのなかには理論的に鋭いものもあったことは事実である。哲学においては新カント主義哲学が、アカデミー哲学の復興を自負しつつ、唯物論を認識批判経過以前の、前カント的遺物として見下していた。経済学においては、『資本利子論の歴史と批判』（『資本および資本利子・第一部』一八八四年）において『資本論　第一部』をとりあげたボェーム・バヴェルクが、『資本論　第三部』の公刊後間もなく論文「マルクス体系の終焉」[19]（一八九六年）を書いて、実体論的価値概念の批判から、『資本論』第一部と第三部の「矛盾」にいたる、詳細な批判を展開した。ドイツ社会民主党内部における修正主義の芽は九〇年代の前半からあったとはいえ、ベルンシュタインが修正主義の論稿を発表しはじめたのはエンゲルス死去の翌九六年以降、修正主義の古典書『社会主義の前提と社会民主党の任務』を刊行したのは一八九九年の年頭であった。それは、マルクス主義のそとからのマルクス理論の諸批判を、かなり雑多で未消化なままに受けいれており、理論体系としてはおよそ一貫性のない折衷的なものであるが、資本主義のなかで労働者階級の状態を漸進的に改良してゆく可能性が開かれたと判断し、その道を歩むことを主張する点において、資本主義の変ぼうのひとつの側面、ひとつの問題点をいいあらわしていたといわねばならない。

マルクス主義のそとからのマルクス批判とマルクス主義内部からの修正主義の抬頭は、しかしながらかならずし

もナロードニキを力づけるものではなかった。ミハイロフスキーたちは最新の理論によって再武装するには老いすぎていた。「最新の理論」のマルクス批判の潮流に棹さしていったのは合法マルクス主義者である。マルクス主義と合法マルクス主義との間には、正統主義対修正主義のロシア版ともいうべき対立と論戦がはじまり、両者の間につくられていた共同戦線は一八九九年には急速に崩れていった。[20] 実はナロードニキ批判の共同戦線はそのころにはナロードニキ側の敗勢が決定化していて必要でなくなっていたのである。合法マルクス主義者たちは、一九〇〇年以後はもはや合法マルクス主義者ではなく、観念論哲学と限界効用説をとり、政治的には、ストルーヴェを先頭として、主要メンバーはすべて自由主義的「解放同盟」（一九〇三年）へ、さらにその後、ペルジャエフを除いてカデット（一九〇五年）に加盟する。かれらの多くは最後には神秘主義に至りつくのだが、そのことは、ロシアにおける市民社会思想のよわさの一面を示しているように思はれる。本題にもどろう。九〇年代末における合法マルクス主義のマルクス主義からの離反は、ロシア資本主義論においてかれらが発展論の立場をとりつづけることをすこしも妨げなかった。それは当然である。ただ、かれらが反マルクス主義的ブルジョワ・イデオローグとして自覚するばあい、かれらの発展論は資本主義はどこまでも発展するものであり、ロシア資本主義も然りという意味あいをますますつよく帯びてくる。そして国際的にはシュルツェ・ゲーファニッツがそうした発展論を書いたのであった。[21]

第五に、九〇年代のロシア資本主義論争における新しい条件として、統計資料の整備充実のほかに、『資本論　第二部』（一八八五年）『同　第三部』（一八九四年）の刊行がある。プレハーノフ『われわれの相違』の時点では『資本論　第一部』だけしか知られなかった。だが九〇年代のはじめにはすでに再生産表式が、中葉には地代論が利用可能となった。九〇年代のロシア資本主義論争の一環をなす市場理論論争、ロシアにおける中世的なるものの

残基の理論は、それを基礎として展開せられてゆくこととなる。

(1) プレハーノフの『社会主義と政治闘争』（一八八三）が亡命革命理論家たちにどのように受けとられたかは、前稿「プレハーノフのロシア資本主義論（三）」（『経済論叢』九〇巻四号）の第三節を参照。『われわれの相違』は『社会主義と政治闘争』。以上に、亡命革命理論家からは無反響だったようである。ただし、論争の相手として期待されるひとりのラヴローフは、もともとロシア資本主義発展論のほうに傾いていた。プレハーノフに対するかれの批判はロシアの現状認識にかかわるのではなく、「労働解放」団の創設が分派行為でツァーリズムを利するという点、すなわち戦術論・組織論にあった。いまひとりの亡命革命理論家チホミーロフは『なぜわたくしは革命家たることをやめたか』（一八八八）によって転向を表明し、ツァーリに許されて帰国した。

(2) それはツァーリズム当局が合法的出版のワクをひろげる方針に転換したからであるよりも、マルクス主義者ポトレソフと合法マルクス主義者ストルーヴェの努力と工夫によった。かれら二人は九三年にア・スクヴォルツォフを説いてその『経済学試論　I　飢饉の経済的原因とその除去のための方策』を出版させ（刊行＝一八九四年）、それが無事に検閲を通過すると、ついでストルーヴェ『批判的覚え書』を出版（九四年）。その成功をみるやポトレソフは当時ロンドンにいたプレハーノフのもとへ急行して、合法的出版の書物を書くようにすすめた。プレハーノフは『われわれの相違　第二部』として考えていたものを、合法的出版として可能な形にまとめ、かつタイトルを『史的一元論の発展の問題によせて』という、アカデミックで晦渋なものに変えた。ポトレソフはその原稿をロシアへ持ち帰って、九四年のクリスマス休暇直前をねらってうまく検閲を通した。初版三、〇〇〇部は三週間に売れつくした。当局はあわててその再刷を禁じた。九〇年代の合法的出版物の多くが晦渋なタイトルになっているのは、同じく検閲事情のためである。例えばレーニン『ナロードニキ主義の経済学的内容とストルーヴェ氏の著書におけるその批判』は元来は『ブルジョワ文献におけるマルクス主義の反映』であったのが合法的出版のために変えられたのである。ポトレソフは『史的一元論』の刊行後、右のレーニン論文をもふくむ共同論集『わが国の経済発展の特徴づけのための資料』を刊行したが、ただちに発禁押収されて失敗。ポトレソフはひるむことなく翌九六年プレハーノフ『ヴォロンツォフ氏の諸労作におけるナロードニキ主義の基礎づけ』の刊行に成功した。かれはそのあと第二共同論文集を計画したが、九六年十二月逮捕されて終った。

「資本論　第一部」のダニエリソン訳は七二年に、『同　第二部』は八五年に合法出版、ただし図書館からはひきあげられ、再刷も禁じられた。九四年には『資本論　第一部』の原典も禁書となる。しかし九七年にはダニエリソン訳『同　第三部』が、検閲当局内での意見の対立ののち通過し、『同第一部、第二部』の再刷も許可、というように、すれすれながらも、『資本論』は合法文書であった。

雑誌については、ストルーヴェたちが、ロボット編集者をたてたり、検閲官を買収したりしながら、『ノーヴォエ・スローヴォ』誌を九七年に計八号刊行し、合法マルクス主義とマルクス主義との共同のマルクス系雑誌としたのが、もっとも大きい意義をもった。当時の検閲制度については Kindersley, R., The first Russian Revisionists, a Study of 'Legal Marxism in Russia, 1962. pp. 234-36. ポトレソフ、ストルーヴェらの合法出版の苦心と経緯については Ibid. pp. 79-104. 『資本論』の翻訳と出版については Калекина, О., Издание марксистской литературы в России конца XIX в., 1957, стр. 18-48.

(3) 合法マルクス主義者の規定は論者によって異る。マルクス理論を採るという意味においては、ジーベルやア・スクヴォルツォフもそのなかにふくまれることになる。合法出版ということをメルクマールとすれば、プレハーノフやレーニンもすくなくともある程度合法マルクス主義者になる。フォン・ラウエなどは、事実そうした解釈に傾いている。Cf. Von Laue, T. H., Legal Marxism and the "Fate of Capitalism in Russia", Review of Politics, Vol. XVIII. (Jan. 1956) pp. 23-46. しかしこれでは合法マルクス主義は歴史的概念の性格を喪失し、無意味である。他方、合法マルクス主義者を、非合法活動の否定者とすることもできないのであって、ストルーヴェなどは非合法活動にもたずさわっていた。キンダースリーが、合法マルクス主義者というのは、活動についての合法・非合法を基準とするのではなくて、身分的状態すなわち地下生活者でない合法的生活者であることを基準とする概念であり、合法的ナロードニキ――ミハイロフスキー、エリセーエフのごとき――という用語にならってできた呼び名であると考証しているのは、妥当と思われる。ただし、キンダースリーが合法マルクス主義をマルクス主義の一亜種としてあつかっている点には同意できない。Cf. Kindersley, op. cit. pp. 222-33. 合法マルクス主義は一八九四―九九年における、マルクス理論に全面的にではないが相当に依拠し、かつマルクス主義と協同する面をもちつつ展開された西欧主義的（近代主義的）思想運動である。その社会的内容は結局のところはブルジョワ合理主義というべきであるが、ブルジョワジーの実際的利益の擁護運動といったものではなかった。かれらはなによりも立憲制の獲得をめざす点にお

いて、マルクス主義者と手を結びえたのである。

(4) ストルーヴェのマルクス主義者との協働の頂点は、九四年にかれが実質上の編集者となった『ノーヴォエ・スローヴォ』誌にマルクス主義者の諸論文をけいさいしたこと、九八年にロシア社会民主労働者党の創立大会（於ミンスク）の「マニフェスト」の起草を依頼されて書いたこと、である。他方かれはドイツ社会政策学派の左派と親しく、その関係でブラウン編の諸誌にしばしば寄稿し、ロシアのなかではゼムストヴォ自由主義者たちを支持した。

(5) 南ロシア・ドネツ河流域の地方の石炭産出量は全ロシアの産出量のうち一八七〇年には三六・八%、一九〇〇年には六九・五%を占めた。鉄鋼生産においてはウラル地方は一八七〇年代には全ロシアの産出量の六七%を占めていたのが一九〇〇年には二八%に低下、南ロシアは同期間にその比率が〇・一%から五二%に上昇した。Лапченко, П. М., История народного хозяйства, т. II. 1952. стр. 147. 一八九〇年代におけるウラルと南ロシア（ドネツ・ドニエプル河地帯）との比較については Schulze-Gävernitz, Volkswirtschaftliche Studien aus Russland, 1899. SS. 303-07. がくわしい。

(6) Tompkins, S R, Witte as Minister of Finance 1892-1903, Slavonic and East European Review, April 1933, pp. 590-606. Von Laue, T. H, The Industrialisation of Russia in the Writings of Sergei Witte, ASSER. Vol. X, Nr. 3, (Oct. 1951) pp. 177-90. ditto, The High Cost and the Gamble of Witte System, Journal of Economic History, Vol. XIII. Nr. 4. (Fall 1953) pp. 425-48. ; Portal, R. La Russie industrielle de 1880 a 1914, 1960, pp. 17-2:. 和田春樹「エス・ユ・ヴィッテ――帝国主義前夜のツァーリズムの経済政策」（『歴史学研究』二五二号　一九六一年五月）はヴィッテ体制の意義を強調する立場から、政策を体系的に分析している。追記、本稿執筆後に Von Laue, T. H., Sergei Witte and the Industrialization of Russia, 1963. が到着した。

(7) 五ケ年ごとの鉄道の新設距離をみると、ヨーロッパ・ロシアについては、一八八一―八五年＝三、〇七四（露里、以下同じ）。一八八六―九〇年＝二、八六四に対して、一八九一―九五年＝六、六四三。一八九六―一九〇〇年＝六、五三二と急増した。アジア・ロシアも加えると一八九六―一九〇〇年＝一五、一三九となる。その増分の主たるものは勿論シベリヤ鉄道であった。Лапченко, П. М., История народного хозяйства, т. II. 1952, стр. 123. 鉄道建設→鉄道用材業の発展→鉄・石炭業の発展という構造については、和田春樹「近代ロシア社会の構造」（『歴史学研究　特集　世界史と近代日本』一九六一年十月）第四節(D)

を参照。一八九〇―一九〇〇年においては銑鉄生産の七〇―七五パーセントが鉄道と金属および金属加工業の需要によって吸収されていた。Лященко, там же. стр. 127.

(8) 九〇年代の農業政策はむしろ農民に対する国家的束縛と地主権力を強化する方向にあった。九二年六月八日の法令は共有地再分割を制限し、同年十二月一四日法令は農民の分与地の譲渡および抵当を禁止し、分与地を「譲渡しえざる身分的フォンド」と規定した。Лященко, там же. стр. 90-91. ロシアの産業革命の時期規定については諸説がある――中山弘正「ロシア産業革命論」(『ロシア史研究』四巻二号一九六三年所載)を参照――が、産業革命を社会経済的カテゴリーとして考えるばあい、農民的営業(クスターリ)の消滅がその一応の完了点のメルクマールとなるべきではなかろうか。圧倒的な農民国のままで、たんに機械が工業に入っただけでは産業革命遂行とはいえまい。

(9) ヴィッテ体制は国際関係面では反独親仏路線をとった。ヴィッテはビスマルクを手本と考えていたのだが、ドイツとの関税戦争によって対独関係を悪化し、外資・外債を主としてフランスに仰ぐことによってフランスとの結びつきをつよくしたことは、ドイツにおいて心情的には親露的なユンカーが穀物保護関税によって対露関係を悪化させたこととあわせて、一種の皮肉な現象であった。ロシアは一八七七年以降保護関税に転じ、次第にそれが高度になり、一八九一年において頂点に達し、ヴィッテはそれに若干の手直しをしたが高度保護関税の線をくずさなかった。Лященко, там же. стр. 191 ff., Schulze-Gävernitz, op. cit. SS. 243-64.

(10) Luxemburg, R., Die Akkumulation des Kapitals, Gesammelte Werke, Bd VI. 1923, S. 221. 長谷部文雄訳『資本蓄積論　中巻』(岩波文庫)一八四頁。

(11) Struve, P., Zur Beurteilung der kapitalistischer Entwicklung Rußlands, Sozialpolitisches Centralblatt, III. Jg. 1893, Nr. 1. S. 1. ストルーヴェが本文の引用句のなかで批判の対象としているのはダニエリソンの『概要』である。

(12) См. Полевой, Ю. З., Запретные марксизма в России 1883～1894 г. 1959. глава II. III., Жуйков, Г., Другие《Особое движение труда》, 1962. глава II. III., Baron, S. H., The First Decade of Russian Marxism, ASEER. Vol. XIV. Nr. 3 (Oct. 1955) pp. 315-30. わたくしは、別稿「〈労働解放〉団についての覚え書」において、プレハーノフを中心とする「労働解放」団の仕事と成果を述べる。

(13) プレハーノフはレーニンとはじめて会ったすぐ後に妻に「きわめて聰明で教養のたかい、才能ゆたかな若い同志が当地へ来た。われわれの革命運動にこのような青年がいるとは何という幸せだろう」と書いた。Исторический архив, 1959, №6. стр. 209. Жуйков Г., указ. соч. стр. 124. に拠る。プレハーノフとレーニンとがはじめて会ったとき、プレハーノフが「あなたは自由主義者に背を向けているが私は顔を向けている」といったことは、後年の両者の対立を暗示するものではあるが、九〇年代においては、それがシリアスな対立としては意識されなかったと解すべきである。

(14) レーニンは一九〇〇年九月『イスクラ』創刊の相談のさいにプレハーノフから手きびしい扱いを受けたとき、「私のプレハーノフへの〈恋慕〉も、まるで手の甲をかえすように消えうせた。……私は私の一生涯に、ひとりの人間にこれほどの心からの尊敬と崇拝を寄せたことは、けっして、けっしてなかった」(「どのように『イスクラ』〔火花〕はあやうく消えかけたか」『レーニン全集④』三六九頁)と書かずにはいられなかったほどに、九〇年代にはプレハーノフに傾倒していた。

(15) Плеханов, Речь на международном рабочем социалистическом конгрессе в Париже (14-21 июля 1889 г.) Соч. IV. стр. 54. 第二インター創立大会に、ロシア代表として本文の二人が出席していた。その模様については Joll, J. The Second International 1889-1914, 1955. pp. 41-42. 本文に引用したプレハーノフの言葉は場当り的な発言と解されてはならない。ロシアの民主主義的変革の原動力がプロレタリアートであるだけでなく、指導力もマルクス主義的目的意識性をそなえたプロレタリアート(党)でなければならぬ、というのが一八八三年以来のプレハーノフの思想であった。そしてロシア・マルクス主義はこの思想を非通の出立点としていた。(意見のちがいは同盟者に関しておこるのである。)ロシア社会民主労働者党の創立大会(一八九八年於ミンスク)は、九人の代表者が集ったにすぎなかったが、その宣言には「ヨーロッパを東へ行けば行くほど、ブルジョワジーは政治的にますます臆病で卑屈になり、ブルジョワジーの文化的および政治的任務は、それだけ多くプロレタリアートの肩にかかってくる」「ロシア・プロレタリアートだけが、自己の必要ゃする政治的自由をかちとることができる。……ロシア・プロレタリアートは専制主義のくびきを打破るであろうが、それは資本主義とブルジョワジーに対する闘いを、社会主義が完全に勝利する日まで、いっそう精力的に続けるためである。」(Первый Съезд РСДРП, Документы и материалы, 1959, стр. 80) と書いてある。しかもこの「宣言」は合法マルクス主義者のストルーヴェが依頼されて書いたのであった。ここに、ストルーヴェのマルクス主義との協働の頂点があるのだが、ブルジョワ民主主義革命におけるプロレタリ

アートの任務の思想がいかにロシア・マルクス主義の中核的思想であったかが知られる。

(16)(17) 別稿「〈労働解放〉団についての覚え書」を参照。

(18) とくにエンゲルスのダニェリソン宛九三年十月十七日書簡 Переписка К. Маркса и Ф. Энгельса с русскими политическими деятелями, 1951, стр. 176-79.『マルクス・エンゲルス選集㉟』二四六—四九頁。

(19) Böhm-Bawerk, E., Zum Abschluss des Marxschen Systems. Staatswissenschaftlichen Arbeiten, Festgaben für Karl Knies, 1896.

(20) 市場理論論争はマルクス主義と合法マルクス主義との離反の決定的契機ではなかった。決定的だったのは、合法マルクス主義者のカウツキー「農業問題」の批判、マルクス哲学から観念論への移行とそれに伴うマルクス批判であった。合法マルクス主義は反正統主義を旗じるしとし、修正主義を受けいれるのではあるが、厳密にいうと両者の間にはちがいがある。ドイツの修正主義は労働組合の現実的要求と結びついていたのであるが、ロシアにおいてそれと同じ性質の修正主義的傾向は「経済主義」であった。合法マルクス主義者は、みずから何よりも政治的自由を要求する点において、「経済主義」の純経済主義的傾向に対立した。合法マルクス主義者は、労働者運動の現実的諸要求とは結びつかず、そのマルクス批判は、もっぱら理論面とくに哲学の面にむけられた。ストルーヴェはベルンシュタインの「哲学的浅薄さ」「中庸」「俗物性」一般的にいえば「理想主義の不足」を不満とした。Vgl. Struve, P., Die Marxsche Theorie der sozialen Entwicklung, Archiv für Soziale Gesetzgebung und Statistik, Bd. XIV, 1899. S. 702. 合法マルクス主義者は労働者運動の自然発生的傾向への適応としての修正主義の路をとったのではなく、マルクス主義理論から自己を解放する媒体として修正主義を利用したというべきであろう。

(21) Schulze-Gävernitz, G., Volkswirtschaftliche Studien aus Russland 1899. かれは一八九二—九三年にモスクワ大学に招かれ、九四年に『プロイセン年報』に一連のロシア研究を発表し、のち右の書にまとめた。